

野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2010年度

2010 年度活動報告

今年度教育空間創造ユニットの活動は、「野童いなか塾」を中心に展開しました。この「野童いなか塾」立ち上げの経緯は地元への広報誌『風と雲の便り』15号に詳しく書かれていますので、活動の具体的な内容はそちらを読んでもらうこととして、ここではこれらの活動の趣旨を中心にまとめておきたいと思います。

歩きながら「地図」を作る

これは一般的に言えることですが、すべての人が利用する国土地理院発行の「地図」は案外地元の人には利用しないようです。地図など利用しなくともよいほど、その土地に精通しているからだ、というのは全くその通りなのですが、それだけが理由ではありません。それはちょうど、車に備え付けられたナビゲーターの指し示す方向が、その境界の道路を知り尽くしたドライバーにとってはあまり役に立たないのと似ています。また、地元以外の人で、目的地に早く到着したいというのではなく、どんな人たちがどんな生業（なりわい）でどんな顔をしている人たちなのかだとか、季節ごとに芽吹く草花にどんなものがあるのだとか、本当にその土地を知りたい、味わい尽くしたいと思う人にとって、なんと「地図」というのは無味乾燥なのでしょう。野殿や童仙房は、その土地全体がほとんど茶畑で占められ、わずかな道路をかううじて見つけられる、そんな地図から何かを得ようとする人は少ないのではないのでしょうか。

それよりは、地域の人が、地元以外の人に知ってもらいたいお薦めのスポット（地点）や、また地元以外の人にとっては、知っていたらとても便利なところ、また地元の人すら知らなかったスポットの発見と再発見があれば、その知を訪れる楽しみが二倍、三倍になることでしょう。「地図」はまた1年中の変化をみてとれないことが特徴ですが、地域は、本当は季節によって大きく変わっているはずですが、そのような「地図」が作れたらいいなという思いが、地域散策をしながら「マップ」づくりをやってみるということになりました。

野殿・童仙房の地域について、もっと詳しく知りたいという願いは、これまでこの地域にお世話になってきた京大側からも強く抱いていた願いでした。私たちの活動は、個別の聞き取りのフィールドワークを除けば、旧野殿・童仙房小学校を中心とした半径数100メートルの範囲でしかありません。地域の人たちとお知り合いになるのに、寄り合いやイベントにだけ頼るのではなく、積極的に地域を歩いて、その土地を全体として眺め、そこに住む人と立ち話をし、木々の匂いに触れ、ときにはウサギや鹿や猪と出会いたいものだと思っていました。地域散策をしながらマップ作りを

思い立ったのはそのような動機も見え隠れしているのです。

多様な意味を持つ「場」をつくる

「野童いなか塾」と銘打っていますが、そこであからさまな教育活動を実践しようと思っているわけではありません。この活動の大まかな目標は、15号でも紹介したとおり以下の三点に集約できると思います。

- ①「体験をつうじた学びの場」～子どもたちの「生きる力」を引き出すような、「いなか」ならではの直接体験ができる場を創りたい。そしてその体験を通じた驚きや発見を、自分自身の関心や理解と結び付け、「知」として根づかせる場にしたい。
- ②「地域発見・地域づくりの場」～地域住民と大学や他地域から訪れた人が共に、地域の魅力に気づき、それを残していくような活動にしたい。またその発見した「魅力」を伝え育てることで、「地域づくり」の場にもしていきたい。
- ③「出会いと交流の場」～子どもとおとな（年長者やお年寄り）、地域住民と訪問者たち、外国からきた人たちなど、様々な出会いが生まれ、互いの交流の中で、新たな発見や成長ができるような場を広げたい。



▶「第0回」野童いなか塾 童仙房での茶摘み体験

第0回（プレ企画）は、とにかく周囲を歩いてみようということで、「童仙房地域散策」を行いました。当初は、さしたる目的もなくぶらぶら歩きのつもりでしたが、茶摘み体験、馬の餌やり、野草観察など、想像以上の収穫があり、これまであまりお話しすることがなかった地域の人とも知り合いになることができ、思わぬ一日になりました。

第1回の春の自然観察会は、NPO自然観察指導員京都連絡会の皆さんの協力を得て、小学校の境界を歩きながら、そこで見つけた生き物や草花について説明してもらい、また学校に持ち帰って、クイズなどを交えながら楽しく学ぶことができました。「自然に学ぶ」はよく言われる言葉ですが、この学びもやはり「自然

と遊ぶ」というリラックスした姿勢でないと、学べないものなのだ、ということに改めて気づかされたということでしょうか。

第2回は、「風と雲の広場」に組み込む形で行われました。「風と雲の広場」のテーマは、「手づくり村・ミニのどう〜つくる×はたらく×まなぶ〜」と題して、ドイツはミュンヘンですでに20年以上も続けられている子どもたちだけの小さな「共同体」づくりの実践を倣ったものです。働きながら自分たちで運営するという、遊びと学びを融合させたこのユニークな試みは、今の子どもたちの環境には欠けたものでしょう。衣・食・遊（住）の世界はこのやさしい「共同体」への入門にあたります。もちろん、子どもだけでなく、大人も楽しめるワンダーランドにしたいという願いも込められています。「手づくり」とは手づくりのものを与える・与えられる、というわけではありません。自分で何でも作ってみるという意味です。この手づくりを支えているのが労働の報酬としての地域通貨「チャオ！」の存在です。（これは2007年の「広場」以来使われているものです。）



▶第5回・風と雲の広場「手づくり村・ミニのどう」

第3回の「野童いなか塾」は、「昔の遊び体験」という企画で、スライムや水鉄砲、紙飛行機などを自分で工作したり、おはじき、ヨーヨー、けん玉、コマ回しなどを使って遊びました。駄菓子屋さんが全盛の時代に子どもだった大人にとって、往時をしのぶ特別の感情からか、子どもより大人のほうが熱心だったという評が広報誌15号でも掲載されています。

第4回は、私たちが普段あまり行かない野殿にスポットを当て、「野殿散策」を行ないました。歴史のある地域にふさわしく、弁天池、福常寺、六所神社など見所満載の地域でした。私たちとはあまり交流があるとはいえないのに、そこに住む人たちが親しそうに話しかけてくれる姿は印象的でした。

第5回は、「秋の自然観察会」で春にお出でいただいた自然観察指導員の方々に再度お願いして、アリゾクや虫こぶ、ザトウムシなど都市にはなかなかお目にかかれない生き物の「冬に向かう」生態を観察する機会を得ました。

第6回は、桑子敏雄先生の集中講義の狭間をぬって、「ソバ打ち体験」を行ないました。また講義のあとに



▶桑子敏雄先生と一緒に「ふるさと見分け」

は、夜は、NPO法人環境文明21の方々も列席して、桑子先生を囲んでの座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」というテーマで話をうかがいました。桑子先生のやさしく語る哲学の面白さと深さに聴くものがすべてが魅了されていました（詳しくは広報誌16号をご覧ください）。

野殿童仙房生涯学習推進委員会主催で著名な落語家桂雀々さんをお招きして、「五十歳五十カ所落語会・地獄巡り」の独演会を開催しました。一時間半にも及ぶ「地獄八景亡者戯」の噺は、中味の面白さは勿論のこと、その語り口の面白さは、一緒に耳を傾けていた、日本語をわからない外国人にも好評でした。

（文責：前平 泰志）

2010年度 活動一覧

5月15日（土）

第0回・野童いなか塾「童仙房地域散策」

6月26日（土）

第1回・野童いなか塾「春の自然観察会」

協力 NPO自然観察指導員京都連絡会

7月24日（土）

第5回 風と雲の広場（第2回・野童いなか塾）

「手づくり村・ミニのどう〜つくる×はたらく×まなぶ〜」

8月21日（土）

第3回・野童いなか塾「昔の遊び体験」

10月23日（土）

第4回・野童いなか塾「野殿地域散策」

11月14日（日）

桂雀々さん「五十歳五十カ所落語会・地獄巡り」

主催 野殿童仙房生涯学習推進委員会

11月27日（土）

第5回・野童いなか塾「秋の自然観察会」

協力 NPO自然観察指導員京都連絡会

12月25日（土）

座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」

お話し 桑子敏雄先生

ゲスト NPO法人環境文明21

野童いなか塾・第6回「ソバ打ち体験」

通年 研究開発コロキウム（大学院生）「ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究—野殿・童仙房地域におけるエコミュージアム活動をフィールドとして」

報道 8月5日 NHK京都放送局

「ニュース610・京いちにち」（午後6：10～7：00）

京特・シリーズ絆